

高校言語教育の実際

—— 話すことを主にして ——

梅下敏之氏が、聞くこと・話すことと教育に取り組みはじめられたのは、高等学校において「現代国語」が一年生に実施された翌年（昭和三九年）のことであった。氏は「現代国語」と名称が改まったのを機会に、（引用者注、聞くこと・話すことと指導に）失敗を恐れず取り組んでみた。（二五）と當時のことにふれていられる。

その後、「恩師野地潤家先生のご指導をいただいたことと、勤務校の話し方研究部顧問津川勇先生の励ましとに」（六）によって、聞くこと・話すことと指導を続けられ、四年には「インタビュアー」、「会議」の授業実践を通して、「指導者として『話すこと』の指導の喜びを」（八）味わわれるようになる。

梅下敏之氏は、こうして三九年から一六年

間、聞くこと・話すことと教育の実践を営々と確実に積み上げられた。それらの実践の成果は、本書において二章から六章にわたり、言語活動の形態ごとにまとめられ収録された。

第一章 高校における話すことと教育

第一節 研究の動機と経過

第二節 話し方教育への取り組み

第三節 実践・研究の中で気づいたこと

第二章 スピーチの学習指導

第一節 スピーチの指導（一）二分間スピーチ

第二節 スピーチの指導（二）グループによる評価

第三節 スピーチの指導（三）説得のばあ

第四節 スピーチの指導（四）N先生の研究

を読んで

第三章 対談・インタビュアー・問答の学習指導

を

第一節 対談の指導——日常的話題のばあ

い

第二節 対談の指導——作家を話題にしたばあ

あ

第三節 インタビュアーの指導

第四節 問答の指導

第四章 会議・討議の学習指導

第一節 会議の指導（一）個人による提案

第二節 会議の指導（二）事前練習（会議の設置）

置

第三節 討議の指導

第五章 座談会の学習指導

第一節 モデル資料の作成

第二節 モデル資料を手引きにした座談会

第六章 朗読の学習指導

第一節 小説「舞姫」の朗読

第二節 近代短歌の朗読

第三節 小説「浄瑠璃寺の春」の朗読——朗読の練習とまとめの朗読

第一章においては、実践を通じて若者が求められた高校における聞くこと・話すこと

教育のありかたが提示されている。

第二章以下の実践事例は、どれも事前の十分な準備がふまえられ、指導を通しての反省が充分になされ、問題点が把握され、課題としての見通しがつけられている。

特に、事前準備の重要性が説かれているが、梅下敏之氏のばあい、これは教材としてのモデル（示範のため）の養成という構想へつながっていく。一部の学習者を事前にモデル（示範）として訓練し、教室で他の学習者に観察させ、学習意欲を起こさせるという指導方式は、梅下氏の実習指導に一貫しており、その効果と問題点とは、それぞれの論考において言及されている。

また、その発展として、モデル自身の言語活動とその反省の資料を学習の手引きとする方法も生み出され、スピーチ・朗読の指導はモデル方式をとり、他の言語活動の指導はモデル資料を手引きとする方法をとる、という見通しもたてられている。さらには、座談会などで、学習者各人に自己の記録を検討させることを始められ、梅下敏之氏の授業は質的な変化をとげていく。

このような具体的な方法を開発することに

よって、技能指導を正面から取り上げつつ、充分な質的（内容的）充実感を伴った授業のありかたが実現されている。

野地潤家先生は、数多くの注目すべき提言を内包した、本書「高校言語教育の実際」について、寄せられた「まえがき」の中で、「戦後高校国語科教育の現場から生まれ出た実践的研究として、最もすぐれた独自の成果の一つと認められる。」(iiペ)と高く評価することを学んでいきたい。

(A五判二七二ページ、昭和五五年九月二〇日、溪水社刊 三、五〇〇円)

(檀原理恵子)